

循環器呼吸器病センターの機能が市民病院に移ります

県立循環器呼吸器病センターの前身である県立尾張病院は、昭和32年に結核医療を目的に開院しました。その後、結核患者数の減少に伴い、一般病院への転換が進められました。

平成17年に、名称が循環器呼吸器病センター（以下、循呼センター）と改められ、高度な医療と24時間対応の救急医療体制の確立を目指し、尾張西部医療圏における循環器疾患治療の中心的な役割を果たしてきました。その治療成績は、県内はもちろん、全国的に見てもトップクラスの評価を得ています。心筋梗塞や大動脈瘤などのたくさんの患者さんが、循呼センターに命を救われています。

しかし近年の医師不足は、循呼センターにも大きな影響を及ぼしました。循環器以外の診療科が次々に診療休止となり、20年4月には50床ある1病棟を閉鎖しました。このままいたずらに時を過ごせば、循環器部門も弱体化が進み、高レベルの医療を提供できなくなる恐れが出てきました。

一方、市民病院は救命救急センターの指定を受けるべく準備を進めてきましたが、最大の課題は循環器部門と集中治療室（ICU）の充実でした。そのため、医師の派遣元である大学に何度も足を運び、協力をお願いしてきました。

この間、県内各地の公立病院が医師不足から医療体制の縮小を余儀なくされる現状を受け、県は「公立病院等地域医療連携のための有識者会議」を設置し対策を協議してきました。そして20年12月に、循呼センターと市民病院の統合を視野に入れた、連携強化を柱とする提案が発表されました。この提案には東海市市民病院と知多市民病院の統合や、稲沢・常滑・新城など各市民病院の病床数の削減なども含まれていました。

県立病院と市立病院の統合は、全国的にもあまり例がありません。しかし循呼センターの優れた機能を当地域に残すためには最善の選択であろうと、関係者の認識が一致し、その方向で調整を進めることになりました。昨年1月に、県病院事業庁・循呼センター・市病院事業部・市民病院で「尾張西部医療圏における循環器医療のあり方に関する協議会」を立ち上げ、稲沢市民病院も加わって、地域全体の問題として検討してきました。そして昨年暮れには、ほぼ合意に達しました。

循呼センターには結核病床と感染症病床がありますが、これらも併せて市民病院に受け入れることになりました。結核病床を引き継ぐことにより、当地域の結核患者が遠方の病院に入院する事態を避けることができます。また、

呼吸器専門医が手厚く配置できるので、肺がんなどの治療レベルが一段と向上することが期待されます。

現在、市民病院は建て替えを進めていますので、統合のスケジュールは工事の進み具合に合わせて変わることになります。昨年秋季には南館の工事が終わり、続いて北館の改修工事に着手しました。この工事では、まずICUの整備を行い、5月には救命救急センターを稼働させます。並行して、結核病床18床・感染症病床6床の整備を進め、9月には工事が完了する予定です。

循呼センターからの移行は2段階で行おうと考えています。まず第1段階として、4月から5月にかけて、医師・看護師・技師など約30人が市民病院に移り、カテーテル検査・治療、心臓・血管手術を開始します。最終的には病床改修工事の完了を経て、10月には、ほとんどの医師を含む100人弱の職員が市民病院に異動する予定です。

また循呼センターの施設は、愛知県がんセンターの医師により、乳がん検診および通院化学療法法のセンターとして活用されることになりました。

循呼センターと市民病院の統合は大事業です。関係者が心を一つにして、地域住民の皆様が良い医療を提供できるよう全力を尽くします。